



## フランシスコ・ザビエルの光と闇

どの角度から光を当ててみるかで、歴史はまるで違ったものに見えてくる。徳永恂、小岸昭両氏の近著「インド・ユダヤ人の光と闇」（新曜社）は、そのことを胸が痛くなるほど感じさせる。

アラビア海に面したインドの西海岸には昔から多くのユダヤ人が住んでいた。中東や欧州で迫害され、追い立てられた彼らにとって、宗教的に寛容なインドは数少ない「安住の地」だった。

その平穏な暮らしが、15世紀末にバスコ・ダ・ガマがアフリカの喜望峰を回って来航してから、どのように変わっていったのか。両氏は、在印ユダヤ人の視点に立つて次のように描く。

ガマが率いたポルトガルの艦隊は、インドの西海岸で略奪や放火、殺戮など残虐行為をほしきままにし、母国のために香料貿易の拠点を次々に築き上げた。

砲火で平定された土地に、イエズス会のフランシスコ・ザビエルが「東洋の使徒」としてやってきた。彼はカトリックに改宗したユダヤ人たちの面従腹背を許さず、異端審問所を設置するよう提言した。

宣教師たちは審問所を設けて多くのユダヤ人を背教者として火あぶりの刑にし、植民地は死者の灰で覆われた。その火刑の炎は、20世紀のアウシュビッツに至るまで燃え続けている――。

東洋にキリスト教を広め、後に聖人に列せられたザビエルは、異端追及の先兵でもあった。その闇の部分鮮やかに照らし出している。